復興デザイン会議
第６回全国大会

孤　立
する都市

2024 年　11 月 29 日（金）
　　11 月 30 日（土）
　　12 月 01 日（日）

会場：東京大学 本郷キャンパス
　　及びオンライン
　　（ハイブリッド開催）

主催：復興デザイン会議

「孤立する都市」というテーマで、第６回復興デザイン会議全国大会を開催する。

令和６年能登半島地震を受け、災害時の孤立と、自立の重要性が浮き彫りになった。

たしかに、インターネットやSNSの力でどこからでも世界中と瞬時に大量の情報をやりとりできる時代となった。一方で、生活する生身の人間は、孤立した地域で、果たして、いかに過ごすことができるのだろうか。

もちろん、被災し孤立した地域において、新しく自立した地域社会が生まれる可能性もある。自立したコミュニティは、次代の都市を作り上げるかもしれない。

被災、孤立、都市、集落、人に考えを巡らせながら、「孤立する都市」について、議論したい。

プログラム

敬称略　※変更の場合があります。

11月30日（土）

開会

9:00-9:10
開会挨拶　大会実行副委員長：中島 直人（東京大学）

U-30 復興デザインコンペ 公開審査会/最終審査会

9:10-14:30
審査委員長：乾 久美子
審査委員：浅子 佳英　岡部 明子　上條 慎司
髙橋 一平　内藤 廣　羽藤 英二
コーディネート：井本 佐保里・中尾 俊介・永山 悟

能登半島地震調査報告と漁港の復興にむけて

14:40-15:25
登壇者：中村 隆（水産庁）　藤本 圭志（小松市）
松永 隆宏（東京大学）　須沢 栞（東海大学）
討議者：冨田 宏（漁村計画）　益子 智之（早稲田大学）
コーディネート：浦田 淳司

復興デザイン研究賞 / 復興政策・計画・設計賞　表彰式

15:35-17:05
祝辞　小川 紀一朗（アジア航測株式会社）
コーディネート：小野 悠・須沢 栞・萩原 拓也・渡邉 萌

未来につなぐ復興デザインの力：現場で問われる計画・設計者の役割

17:15-18:15
五十嵐 太郎　伊東 豊雄　乾 久美子
内藤 廣　羽藤 英二
コーディネート：小野 悠・益邑 明伸

懇親会

18:30-
1時間程度・有料

12月01日（日）

次世代が描く地域復興：中高校生による事前復興の活動

9:00-11:00
あなん防災地理部　愛媛県立宇和島東高校
愛媛県立大洲高校　愛媛県立大洲農業高校
愛媛県立南宇和高校　愛媛県立八幡浜高校
大阪教育大学付属高校天王寺校舎　静岡県立天竜高校
コーディネート：U30・若手 WG

基調講演：東日本大震災の復興検証から、取り組みのあり方を考える

11:10-12:10
講演者：菊池 雅彦（東京大学）
コーディネート：福田 大輔

台湾における官民連携の災害対応−2024 年花蓮地震を事例に

13:00-14:00
Lee Fuhsing（茨城大学）
コーディネート：中居 楓子・小谷 仁務

復興現場で奮闘する若手：復興デザインにおける当事者意識

14:10-15:40
苅谷 智大（街づくりまんぼう）
小池 裕子（NPO法人中越防災フロンティア）
永山 悟（陸前高田ほんまる(株)）　吉海 雄大（益城町地域おこし協力隊）
コーディネート：荒木 笙子・大津山 堅介・渡邉 萌

全体討議

15:50-16:30　進行：福田 大輔・浦田 淳司

閉会

16:30
閉会挨拶　藤井 照久（復建調査設計株式会社）

11月29日（金）

復興デザインスタディツアー　「福島浜通りの暮らしと今」

復興デザイン全国大会の開催にあわせて、福島浜通り地域を対象に復興デザインスタディツアーを開催します。
浜通り地域に住んでいた多くの人々は、東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故により、広域避難を余儀なくされました。除染が進み、徐々に避難指示が解除されていく中で、居住者が少しずつ増えていますが、居住人口はいまだ少なく、公共交通やサプライチェーンや、病院や商業施設といった都市機能は、依然弱く、「孤立」しているともいえます。「福島浜通りの暮らしと今」を知ることで、なにがこの地域で次のステップとして必要なのか、今取り組まれている各地での復興や今後起こりうる復旧・復興で、なにが求められるのか、考え、議論しましょう。

■集合解散：いわき駅にて 10 時 35 分 集合・18 時解散　■費用：500 円
■問い合わせ：https://forms.gle/2UEQea2bZXbXAFmA7
※詳しいルート情報・参加申し込みは、https://dss.bin.t.u-tokyo.ac.jp/tour_2024/ を御覧ください。

【CPD 制度】 本シンポジウムおよびツアーは、土木学会継続教育（CPD）プログラムに認定されております（※）。
詳細は大会 HP を確認ください。　※ 11/29 5.5 単位、11/30 7.7 単位、12/1 6.2 単位

【お問合せ】 全国大会についてのお問合せは
https://forms.gle/2UEQea2bZXbXAFmA7 からご連絡ください。

【大 会 HP】 https://dss.bin.t.u-tokyo.ac.jp/symposium/2024_2/

お問合せ　大会HP

審査委員

U30 復興デザインコンペ
審査委員
浅子 佳英
PRINT & BUILD

復興政策賞・計画賞
審査委員
伊藤 香織
東京理科大学

U30 復興デザインコンペ
審査委員長
復興設計賞副審査委員長
乾 久美子
乾久美子建築設計事務所
横浜国立大学

復興デザイン研究賞
副審査委員長
大月 敏雄
東京大学

U30 復興デザインコンペ
審査委員
岡部 明子
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員
小野田 泰明
東北大学

復興設計賞
審査委員
岡村 仁
株式会社 KAP

U30 復興デザインコンペ
審査委員
上條 慎司
株式会社上條・福島都市設計事務所

復興デザイン研究賞
審査委員
小林 祐司
大分大学

復興デザイン研究賞
審査委員
近藤 民代
神戸大学

復興デザイン研究賞
審査委員
佐藤 慎司
高知工科大学

復興設計賞
審査委員
柴田 久
福岡大学

U30 復興デザインコンペ
審査委員
髙橋 一平
髙橋一平建築事務所

復興デザイン研究賞
審査委員
田島 芳満
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員
田中 貴宏
広島大学

U30 復興デザインコンペ
審査委員
内藤 廣
内藤廣建築設計事務所
多摩美術大学

復興政策賞・計画賞
審査委員
中居 楓子
名古屋工業大学

U30復興デザインコンペ審査委員
復興デザイン研究賞審査委員
復興設計賞・政策賞・計画賞
審査委員長
羽藤 英二
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員長
原田 昇
中央大学
東京大学名誉教授

復興設計賞
審査委員
日野 雅司
SALHAUS
東京電機大学

復興政策賞・計画賞
審査委員
廣井 悠
東京大学

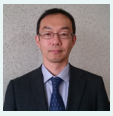
復興デザイン研究賞
審査委員
福田 大輔
東京大学

復興デザイン研究賞
副審査委員長
本田 利器
東京大学

復興デザイン研究賞
審査委員
牧 紀男
京都大学

復興デザイン研究賞
副審査委員長
円山 琢也
熊本大学

復興デザイン研究賞
審査委員
目黒 公郎
東京大学


復興デザイン研究賞
審査委員
森脇 亮
愛媛大学

復興設計賞
審査委員
吉谷 崇
株式会社設計領域

復興政策賞・計画賞
審査委員
渡部 英二
東急建設株式会社

復興政策賞・計画賞
副審査委員長
渡邉 浩司
民間都市開発推進機構

大会実行委員

復興デザイン会議会長
徳永 幸久
東京地下鉄株式会社

大会実行委員長
本田 利器
東京大学

大会実行副委員長
中島 直人
東京大学

復興デザインツアー小委員会
委員長
藤井 照久
復建調査設計株式会社

復興デザインツアー小委員会
副委員長
小川 紀一朗
アジア航測株式会社

大会実行委員
荒木 笙子
岩手大学

大会実行委員
井本 佐保里
日本女子大学

大会実行委員
浦田 淳司
筑波大学

大会実行委員
宇山 穂
復建調査設計株式会社

大会実行委員
大津山 堅介
東京大学

大会実行委員
大野 桃菜
アジア航測株式会社

大会実行委員
小野 悠
豊橋技術科学大学

大会実行委員
川上 佐知
復建調査設計株式会社

大会実行委員
邱 文心
東京大学

大会実行委員
小谷 仁務
東京科学大学

大会実行委員
佐野 寿聰
アジア航測株式会社

大会実行委員
新宮 圭一
復建調査設計株式会社

大会実行委員
須沢 栞
東海大学

大会実行委員
中居 楓子
名古屋工業大学

大会実行委員
中尾 俊介
東京大学

大会実行委員
永山 悟
東京大学
陸前高田ほんまる株式会社

大会実行委員
萩原 拓也
名城大学

大会実行委員
牧 澄枝
アジア航測株式会社

大会実行委員
益邑 明伸
東京都立大学

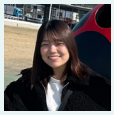
大会実行委員
渡邉 萌
東京大学

学生実行委員

学生委員
佐藤 凌真
豊橋技術科学大学

学生委員
新間 英花
日本女子大学

学生委員
須賀 理帆
東京大学


学生委員
手代木 祐可子
東京大学

学生委員
寺内 陸
豊橋技術科学大学

学生委員
平松 正吾
東京大学

学生委員
本間 柚希乃
日本女子大学

学生委員
増田 慧樹
東京大学

学生委員
松永 隆宏
東京大学

復興デザイン会議 第 6 回全国大会　登壇者

基調講演　東日本大震災の復興検証から、取り組みのあり方を考える

12 月 01 日（日）
11:10-12:10

東日本大震災の復興は多様な地域で長期にわたり、震災に関わった関係者は（自分もそうであるが）一地域、一時期の関与にならざるを得ない。またある地域で成功した取組が別の地域では逆の結果のこともある。各地域で実践された復興を一律に語るのは難しいが、復興の全体を時間的・空間的に俯瞰し検証することは、今後の復興を考える上でも、各地域・各時期の復興の取組みの上でも重要であると思う。ここでは、震災からの復興プロセスを「地域」と「人」という2つの観点で整理し、今後の取組みのあり方を考えてみたい。

講演者
菊池 雅彦 東京大学 特任研究員

【経歴】1988 年埼玉大学建設工学科卒業。同年建設省（現国土交通省）に入省。都市計画行政を中心に、震災復興、国土政策に携わるほか、山形県庁、宮崎市役所、四国地方整備局等で勤務。最近は東日本大震災の復興やその検証に携わってきた。2024 年に退職し、大学で復興や地方都市の再生の研究活動をしている。

能登半島地震調査報告と漁港の復興にむけて

11 月 30 日（土）
14:40-15:25

登壇者

中村 隆
水産庁

能登半島地震の被災地では、現在多くの地域で漁業が再開しており、輪島市や珠洲市等の外浦地域においても施設の復旧が進展し漁業の再開が進められているところです。このような中、ここでは、主に地盤隆起により被災した漁港等に係る復旧・復興の方針とともに、現状の課題や対応、今後の見込み等について、紹介します。

藤本 圭志
小松市

石川県南部に位置する小松市では（輪島から約 140 ㎞、本郷－甲府に相当）、県の要請を受け 1 月 4 日に能登の被災者受入れを開始。ピーク時、温泉旅館・ホテル等に約 600 世帯 1,100 人が生活。手探りの受入れ当初から仮設入居等次のステップ移行が概ね完了するまでを振り返ります。

討議者

松永 隆宏
東京大学

須沢 栞
東海大学

富田 宏
漁村計画

益子 智之
早稲田大学

未来につなぐ復興デザインの力：現場で問われる計画・設計者の役割

11 月 30 日（土）
17:15-18:15

本トークセッションでは、頻発する自然災害への対応において、被災者に寄り添いながら、未来に備えた空間をどう築くか、復興デザインが果たすべき役割を議論する。また、パブリックからプライベートまで復興を進める主体が多様化する中で、復興の現場における計画・設計者が果たすべき役割を再考する。

五十嵐 太郎
東北大学

© 藤塚光政

伊東 豊雄
伊東豊雄建築設計事務所

内藤 廣
内藤廣建築設計事務所
多摩美術大学

乾 久美子
乾久美子建築設計事務所
横浜国立大学

羽藤 英二
東京大学

台湾における官民連携の災害対応
－2024 年花蓮地震を事例に

12 月 01 日（日）
13:00-14:00

LEE FUHSING
茨城大学

2024 年 4 月 3 日、台湾東部の花蓮で M7.2 の地震が発生した。行政主導ではなく、NPO や NGO などの民間組織が迅速に救援･支援を行い、避難所の運営を含め、官民連携のもとで復旧・復興対策が円滑に実施された。今回は、台湾における行政と非営利組織の連携体制とその背景について話題を提供する。

復興現場で奮闘する若手：復興デザインにおける当事者意識

12 月 01 日（日）
14:10-15:40

吉海 雄大
益城町地域おこし協力隊

頻発する災害を受け、阪神、中越、東北などの被災地が希望を示したように、熊本も未来像の1つとしてほか被災地から見て勇気や希望を感じる現場となることを目指しています。地域と共に経験を積み重ねることで、熊本の実践が復興の未来系としてつながると願っています。

苅谷 智大
（株）街づくりまんぼう

目の前のあるべき論と距離を置いてみた時のあるべき論とが時に相剋する中で、現場に身を置いたからこそできたこととは何か、また、できなかったことは何か。改めて振り返ることが出来ればと思います。

永山 悟
陸前高田ほんまる株式会社

各地で奮闘してこられたみなさんと議論できることが非常に光栄ですし、多くの支援により復興を進めてこられたので恩返しとして今後の復興の力になれれば幸いです。
I am honored to discuss this issue with all of you working hard nationwide. Thanks to your invaluable support, the reconstruction was possible, and I would be thrilled to contribute further to ongoing efforts.

小池 裕子
NPO法人中越防災フロンティア

中越地震で被災と支援を経験。現在は山古志で観光事業、復興支援を行う中で過疎地の経済復興の難しさを感じます。プロではない一般人が関われる場、理解と応援につながる支援のカタチや寄付コミュニティについてご紹介させていただきます。

U-30 復興デザインコンペ

公開審査会／最終審査会

11 月 30 日（土）
9:10-14:30

審査委員（敬称略）

審査委員長：乾 久美子（建築）
内藤 廣（建築・都市）　髙橋 一平（建築）
岡部 明子（建築）　浅子 佳英（建築）
上條 慎司（都市）　羽藤 英二（社会基盤）

能登半島地震で集落が孤立してしまう状況を目の当たりにした。災害は、地域で進行している衰退が加速するといわれているが、能登半島の孤立もそうしたもののひとつかもしれない。インフラがつながっていることが当たり前の日常は、すでに綻びはじめているのだろう。一方で、孤立は本当に課題なのかという批判的な見方もあるはずだ。U-30 の方々の取り組みによって、孤立の課題と乗り越え、可能性が見出されることを楽しみにしています。

審査委員長　乾 久美子

一次審査通過者

グループ 1
ハレとケと小山車

大木鼓太
（芝浦工業大学）

これまでの復興は、人口増加の上に成り立ってきました。縮小社会を迎えた現在、復興の在り方そのものを問うことが大切だと思います。災害・復興に対し建築に何ができるのか。正解のない課題に対して議論を続ける意義の一端を担えたらと思います。

グループ 2
復興の階梯
ー朝市から広がるなりわい再生ー

堤 悠貴　梅﨑真睦　齋藤結愛　渡辺紗帆
（愛知工業大学）

この度は、一次審査選出ありがとうございます。本提案では、石川県輪島市朝市通りを舞台とし、今までの近代復興とは異なる、なりわいコミュニティを尊重した迅速な段階的復興を提案致しました。本提案を発表できることを楽しみにしています！よろしくお願いいたします！

グループ 3
生業景勝

二橋 颯　森田梨花　馬場健互　伊藤南々葉
（愛知工業大学）

令和 6 年能登半島地震により文化的景観と人々の生業の場が被災した。それに伴う復興事業を通して、風景の喪失も懸念される。本提案では「生業コモンズの再編」と「共生の段丘」により、「景勝」の地である奥能登の生業と風景の「継承」を目指す。

グループ 4
蜜柑に生きるものたちへ

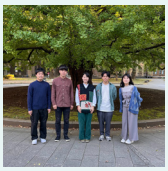
衣笠恭平
（横浜国立大学）

かつて日本に残っていた自然と共生した豊かな風景は、近年の少子高齢化や過疎化などによってその存続が危ぶまれています。ここに建築によって風景を未来へ繋げる一つの解を示し、皆様と議論したいと思います。

グループ 5
水害に生きる
～みずまての教えの再考～

神宮 暁
（小山工業高等専門学校）

豊かな水が育んだのどかな田園風景が広がる生井地区。私は今回、かつて水と身近にあった暮らしをヒントに、この地区に伝わるみずまての教えを現代の環境に合うよう再考する提案を行います。



グループ 6
福浦やまみちしるべ

平松正吾　石原実季　茅沼耕平
西内大翔　和栗千明姫
（東京大学）

愛媛県愛南町福浦地区は、南海トラフ巨大地震で津波被害の危険がある漁村地域です。私たちは、少ない人口でも豊かな生活が実現されるように、発災前後のタイムラインを設定し、日常に寄り添う事前復興プランを提示します。

グループ 7
遊子を見晴らす
ー「孤立」に適応する地域複合拠点の提案ー

星 葵衣　上町剛志　張 文治
宮崎将也　渡 由貴
（東京大学）

宇和島市遊子の漁村と段畑の景観は、伝統的な生業と地域で連帯する風土が生み出してきた。過疎化が進み、災害後には浦々や半島全体が孤立する中で、風土を活かし速やかな生業の復興に繋げるための仕組みを提案する。

グループ 8
浜の修景
- 都市型漁業集落を縫合する桟橋防火帯 -

吉川 花　飯島隆也　呉 帥辰
（早稲田大学）

都市に取り残された都市型漁業集落。コミュニティは希薄になり防災機能も失っている。本提案では海と陸の 2 種類の桟橋を防火帯として挿入することで、集落を防災的に隔てつつも線状空間で縫合し、かつての人の繋がりや海へのまなざしを現代的に再興する。

グループ 9
遍路宿再建計画
~ 孤立せず，孤立できる「居方」に着目して ~

松永隆宏　小野寺菜乃　西村萌希
能祖遥一　山田海音
（東京大学）

今回の提案は、現地調査でお世話になった宿のオーナーさんとの会話から着想を得たものです。御荘が抱える「孤立」と向き合い、「住み続けたい」「住み続けられる」と思える地域デザインを提案します。

グループ 10
揺らぐ大地　揺るぎなき伝統

松谷滋瑛　手代木祐可子　松本望実
尹逸偉　東條秀祐
（東京大学）

地域の歴史を伝え、観光客を惹きつける古い町は、災害による「孤立」のリスクを表裏一体で抱えている。そこで、昨冬に重伝建に選定された宇和島市津島岩松を対象に、地域内外の「連携」を強めるビジョンを提案する。

グループ 11
ハレの倉場
―能登の祭りと防災を支える備えの空間―

松下琴莉
（設計事務所勤務）
西村明日香
（横浜国立大学）

過疎化、高齢化、インフラの脆弱性…能登半島地震で露呈した被災地の孤立は様々な要素が絡み根深い。この提案はそれらを全て解決するようなものではないが、ささやかに、しかし確かに地に根を張り、人々の心と生活の支えとなる小さなコミュニティ像の提案である。

復興政策賞・計画賞・設計賞

表彰式　11月30日（土）15:35-17:05

審査委員（敬称略）

審査委員長：羽藤 英二（都市工学）

副審査委員長：渡邉 浩司（都市計画／政策賞・計画賞）
乾 久美子（建築設計／設計賞）

政策賞・計画賞：伊藤 香織（都市デザイン）
中居 楓子（土木計画）
廣井 悠（防災計画）
渡部 英二（復興事業）

設計賞：岡村 仁（建築構造）　柴田 久（景観設計）
日野 雅司（建築設計）　吉谷 崇（土木設計）

困難な状況に直面している地域の復興に向けて、今どんな政策と計画が求められているのだろうか？審査員が直接現地に赴き、政策やプランニングの現場での困難や葛藤を伺い、審査員同士で議論を重ねて、多くの政策とプラニングの候補の中から、今年度の受賞を決定した。災害は予期せず発生するからこそ、政府や自治体などの組織が復興の目的を達成するために定める方針や計画だけでカバーできないケースがあるだろう。原子力災害のように信頼できるものが何かわからないことだってあり得る。こうした混乱の中、それでも政策の方針を打ち出し、自ら行動し、小さな SOS に耳を傾け、プランをつくり修正を重ねていく。そうした地道な行為こそが、復興デザインの現場で求められている政策と計画といえるのではないだろうか。だからこそ、受賞した諸機関のみなさんの果敢かつ地道な行動力に敬意を表したい。本当におめでとうございます。　審査委員長　羽藤 英二

受賞者コメント等はこちらからご覧いただけます。

復興政策賞

東京都の事前復興訓練

東京都都市整備局

審査員コメント

■ 東京都は阪神・淡路大震災を教訓とし、約 30 年間継続して事前復興に取り組んでいる。この取り組みはきわめて先進的なものであるとともに、その内容や手順は現在全国各地に水平展開している。なかでも、人材・地域組織の育成という点で本事業の根幹をなす都市復興訓練等各種訓練は、復興計画の策定訓練のみならず、訓練企画能力や家屋被害調査スキルも養成するもので、広域的な視点も考慮されており、計画自体も社会の変化に応じて柔軟な対応を重ねている。とりわけ本事例は、復興時の手順を事前に確認するのみならず、これを都市の強靭化へ繋げようとする工夫がなされており、事前防災と復興を同時追及しようとする思想がその背景にある。このように、本事業は震災復興マニュアルの習熟のみにとどまらない多様な効果が期待され、復興政策賞にふさわしいものと評価される。

阪神・淡路大震災の語り部

兵庫県、神戸市、阪神･淡路大震災記念 人と防災未来センター、語り部 KOBE1995、NPO 法人 神戸の絆 2005、NPO 法人 阪神淡路大震災 1.17 希望の灯り、北淡震災記念公園震災の語りべボランティア、神戸新聞社、サンテレビ 他多数

審査員コメント

■ 来年で発災後 30 年を迎える阪神・淡路大震災は、近代都市を直撃した初めての直下型地震である。住宅やインフラ被害は多くの人を過酷な状況に置き、震災関連死を含め多くの人々の命を奪った。阪神・淡路大震災の語り部は被災者個人の経験を生の声として伝える活動を核に継続されており、長期にわたる活動を通じて、被災者の生活や心の変化を受けとめ心の復興に寄り添ってきた。さらに、多様なメディアによるアーカイブ化と発信、震災を経験していない若い世代への積極的な継承、減災の知恵の構築、そしてその後国内で発生した様々な災害における被災者の支援といった多岐にわたる活動は、震災の記憶を被災地内外で重層的に発展させることに大きく貢献してきた。受賞者を代表として、これらの活動を長期的に支える場づくりにかかわったすべての方に敬意を表したい。

能登半島地震後の漁業地域の復旧・復興に向けた取組

水産庁漁港漁場整備部

審査員コメント

■ 令和 6 年能登半島地震では、地域の生業の拠点となる漁港が、地震の揺れと津波被害に加えて、最大 4m の地盤隆起による被害を受けた。輪島市、珠洲市を中心に泊地等の利用が困難となる中、水産庁は、各漁港の早期の復旧・復興の実現に向けていち早く技術的な復旧方法と手順を隆起の程度に応じて地域パターン毎にとりまとめた。短期的な生業再開と長期的な機能向上のための復旧パターンに加え、海業振興など新たな地域像を復興デザインのひとつのあり方として明確に位置付けたことは特筆に値しよう。困難な状況に直面している漁業従事者の状況を踏まえ、水産庁と専門家が地域に自ら出向き、会議を重ね地元ニーズも踏まえながら議論をとりまとめたことで、狼煙漁港などで迅速な復旧に向けた測量と設計が既にスタートしていることを高く評価したい。

原発被災地域（福島県小国地区）における住民によるリスクマネジメント

放射能からきれいな小国を取り戻す会

審査員コメント

■ 福島県の小国地区で、福島第一原子力発電所の爆発に伴う放射性物質による汚染に対して、住民が自ら地区の放射線量を測定し、線量を可視化することで被ばくリスクの回避・軽減を目指した取り組み。地区で採れた農産物の食品測定所を開設するなどの下部組織にも発展した。線量計測の空間密度や頻度、メッシュマップによる線量の可視化と全戸配布や掲示による共有方法、それを受けての住民の意思決定など、大学の協力があったとはいえ、住民有志の活動でここまでできることを示した。さらに復興に留まらない視点からは、”上からの”マネジメントに主眼が置かれがちな日本のスマートシティに対して、ICT やセンサー等の技術が普及しアクセスしやすくなることで“草の根の”あるいは“自治的な”スマートシティが可能であることを示す優れた取り組みであると高く評価できる。

復興計画賞

徳島県美波町における事前復興

美波町

審査員コメント

■ 徳島県美波町では、行政課題を解決する機会を捉えながら、基幹病院の高台移転を皮切りに、こども園等の高台移転が進行中である。一方、低地部にも投資を行い、避難施設や避難経路等の整備が進んでいる。特に診療所は、避難ビルの機能に加えて、開放的な公共空間を設け、複合施設として地域交流の拠点となっている。さらには、高台現地ツアーなどの住民参加イベントの開催やサテライトオフィスでの住民交流等、住民が主体になることで防災意識を向上させている。また、有事の際の速やかな復興に向けて、防災公園・広場や後方支援基地の整備、孤立化対策、地元木材を仮設住宅用に迅速に使うための新たな流通の仕組みなどにも積極的に取り組んでいる。事前復興をまちづくりの視点で捉え、具体化している事例として大変優れている。

復興設計賞

「みんなの家」プロジェクト

HOME-FOR-ALL

審査員コメント

「みんなの家」プロジェクトは、東日本大震災をはじめとする被災地において、応急仮設住宅団地内で被災者が安心して集える空間を提供するために、建築家の伊東豊雄氏らによって企画されたものである。震災直後、均一で無機質な仮設住宅エリアに住民交流の場を設けるため、仙台市に第一号が建設され、その後も釜石や気仙沼など16カ所に展開。各地で建築家と住民の対話に基づき、使い勝手と居心地の良さを兼ね備えた設計が実現された。この取り組みは、熊本地震や令和２年７月豪雨でも継続され、2024 年の能登半島地震の際にも新たな建設が検討されている。財源は県の支援だけでなく、補助金や寄付金を活用し、支援の仕組みとして NPO 法人「HOME-FOR-ALL」が設立された。この取り組みは、復興における小さな公共施設の重要性を提示し、その具体的なプロセスを構築したことで、被災者の生活復興の方法論だけでなく、理念と実践の両面で自治体主導の復興事業にも影響を与えた功績がある。今後の復興方針の転換点になりうる運動であることから、「みんなの家」を復興設計賞として表彰する。

松日橋

松日橋受益者組合

審査員コメント

岩手県住田町を流れる気仙川に江戸時代以前から架けられていたとされる松日橋は、水害に対する先人たちの知恵と工夫が詰まった木橋といえる。約 40mの長さを持つ本橋の橋脚は、又股（ザマザ）と呼ばれる太い木の枝分かれした部分が使われ、乗せられた橋板の重みと又股の絶妙な角度にかかる水圧によって安定し、組み上げられる。また洪水時にはこの橋板が浮き、又股が水流に逆らうことなく倒れることで、橋全体が流されるよう設計されている。一方で上記橋脚等の各部材はワイヤーロープで繋がれており、両岸からは流失しないことから、川が通常時に戻った後回収され、再び架橋に用いられる。左岸側松日地域と右岸側中山地域の住民が協力し、自分たちの生活動線を守る持続可能な復旧作業が伝統的に今なお続けられている。行政や企業からではなく、地域に根ざした住民自らの手によって暮らしと風景を再生させる復興デザインの規範として高く評価したい。

次世代が描く地域復興：中高校生による復興・事前復興の活動

12 月 01 日（日）
9:00-11:00

長期的な復興を描く主体となる全国各地の中高生が、地域の災害時の課題解決と平常時のまちの活性化を目的とした「事前復興」の活動内容を発表します。「地域のよりよい理解を下敷にした災害復興への備え」を理念に、様々な世代の人々とともに自ら地域を歩き、様々な声に耳を傾け懸命に考えてきました。この取組みが、地域の復興を描く「人づくり」を担う防災教育等の多様な展開の一助となることを期待します。

あなん防災地理部

本場の防災地理部の影響を受け、徳島県内の小中高校、高専生、大学生等が集まり活動を始めました。自分の暮らす地域の災害リスクの把握や復興デザインの検討を行っています。また、陸前高田市への視察や地元での報告会、事前復興シンポジウムでの発表なども行ってきました。

愛媛県立 宇和島東高等学校

東北研修の学び、大学院生との学び、課題研究を中心とした探究的な学びを宇和島の事前復興に向けたアクションにつなげ、130 周年を迎えた宇和島東高校の伝統となりつつある防災への取組をより持続可能なものへと深化させていきます。

愛媛県立 大洲高校

私たち大洲高校は、住民、日本人観光客、外国人観光客に対して防災対策に関するアンケート調査を実施しています。今後この調査結果を基に、大洲が抱えている課題を発見し、解決に向けた取組を行っていきます。大洲市民の防災意識の向上に貢献するような発表にします！

愛媛県立 大洲農業高校

令和 5 年度から肱川における「水災害リスクを踏まえた防災まちづくり・報告会」に参加し、防災行政について提案するなど形にして参りました。今年度も「大洲まちあるき」などに参加し、防災への理解を深めてまいりました。主に肱川流域を軸に、地域の防災を考え、提案することを目標にしています。

愛媛県立 南宇和高校

私たちは愛南町を、災害による被害者ゼロの町にすべく、町民の防災意識向上のため活動しています。また、被災後も安心して暮らせる町づくりのため、高校生にできることを考えています。被災地で復興に携わった方々から受け取った思いを、町づくりに活かしていきます！

愛媛県立 八幡浜高校

－「伝える防災」－
広島市の坂町では、過去の豪雨災害を伝える石碑があったにもかかわらず、平成 26 年の豪雨災害では多くの人命が失われた。モノだけではなく「人」が災害を伝える必要があるのではないだろうか。高校生が災害を伝えるために何ができるだろうか。

大阪教育大学附属 高校天王寺校舎

大阪教育大学附属高等学校は都市部の避難所問題の解決について取り組みました。都市部では昼間人口と夜間人口の差が大きく、その差は避難所の収容人数、設備には反映されていないのが現状となっています。そこで、車中泊という避難態系を取り入れ、快適かつ多くの人が避難できる避難所プランを提案します。

静岡県立 天竜高校

私達は、中山間地域ならではの地形や自然災害リスクを考慮し、地域の事前復興を考えています。今年度は、まち歩きや二俣川周辺の調査を通じ、嘯月橋の現状や歩行者用橋のデザインについて着目しました。住民が参加できるカードゲーム形式のワークショップを提案し、地域に根ざした防災意識の普及を図ります。

復興デザイン研究賞　受賞者

受賞者コメント等は
こちらから
ご覧いただけます。

審査委員（敬称略）

審査委員長：原田 昇（交通計画）

副審査委員長：大月 敏雄（建築計画）　円山 琢也（交通計画）
本田 利器（地震工学）

小野田 泰明（建築計画）　菊池 雅彦（復興計画）
小林 祐司（避難行動）　近藤 民代（居住環境計画）
佐藤 愼司（海岸計画）　田島 芳満（海岸工学）　田中 貴宏（都市計画）
羽藤 英二（都市計画）　牧 紀男（防災計画）　森脇 亮（環境工学）
福田 大輔（交通計画）　目黒 公郎（防災計画）

復興デザイン賞は、復興の現場との応答や実践への展開を意識して取組み、それを解決する新しい復興デザイン分野の構築に貢献し、具体的な成果をあげている個人、あるいは、その可能性が高い個人を高く評価してます。今年度は、自薦・他薦合わせた 17 名の応募者の中から、彼らの主要論文・関連論文、推薦理由を参照し、審査委員会での評点と議論に基づいて、6 名の受賞者を決定した。この論文賞の取組みが、復興デザイン研究の多様な展開の一助となることを期待する。

審査委員長　原田 昇

最優秀研究賞

Design with Nature の応用による東日本大震災における災害予測と復興デザインの連続的な展開

上原 三知

学生時代に Design with Nature 理論に触れ、研究者になり日本への応用のための関連資料に出会う。同理論と日本の歴史的資料が東日本大震災の複合災害の予測と復興に有用なことを 10 年かけて実証でき、評価を頂けた事に心より感謝申し上げます。

【経歴】信州大学教授（芸術工学博士）。東日本大震災の復興とリスク評価に取り組み、福島県新地町の復興で 2021 年グッドデザイン賞（街区・地区計画部門）、関連研究で平成記念研究助成 (2021),IFLA Luminary Award(2023) を受賞。

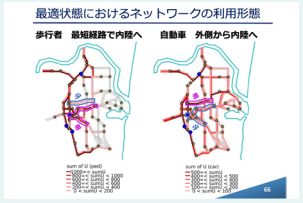
優秀研究賞

津波遭遇リスクを最小化する歩車混合避難交通の最適化に関する研究

奥村 誠

私のライフワークは都市間旅客交通ネットワークの最適化ですが、東日本大震災以来、数々の優秀な学生とともに津波避難への応用に取り組みました。歩行避難が困難な人々や地域の存在を踏まえた避難計画の計算方法にたいして評価いただき、大変嬉しく思います。

【経歴】京都市出身。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。同大学助手、講師、広島大学助教授を経て、2006 年より東北大学教授。地域計画・土木計画を専門とし、ブラジル、シベリア、ボリビアでのプロジェクトにも関わる。京都大学博士（工学）。



学習者の主体的態度獲得に向けた防災教育アクションリサーチ

中野 元太

この度は、栄誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。本研究は、地域住民、自治体関係者、学校教育関係者、そして多くの研究者との協働によって実現しました。審査員の皆様と協働頂いた皆様に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

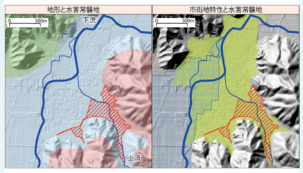
【経歴】京都大学防災研究所巨大災害研究センター助教。博士（情報学）。青年海外協力隊、国際協力機構 JICA 短期企画調査員、NPO、日本学術振興会特別研究員（DC2）、京都大学防災研究所特定研究員を経て 2019 年より現職。自然災害科学編集委員会編集幹事、防災教育学会理事。

都市づくりにおける水害実績及び洪水浸水想定を用いた水害リスクの評価に関する研究

中野 卓

本研究は、都市・住宅計画における予防的な水害対策の手掛かりになればと始めたものであり、この度、その業績が評価されたことを大変光栄に存じます。研究の契機を頂きました国総研・木内望様をはじめ、これまでご支援頂きました皆様に御礼申し上げます。

【経歴】2018 年東京大学大学院博士課程修了。博士（環境学）。同、特任研究員を経て、19 年より建築研究所。水害リスク分析に関する研究業績にて、日本都市計画学会年間優秀論文賞を2度（21 年、24 年）受賞。専門分野は都市計画（土地利用・建築規制）、住宅政策。



熊本地震後の農村地域における空間的資源のあり方に関する研究と実践的研究活動

野口 雄太

この度は優秀研究賞を賜り、大変光栄に存じます。ご推薦いただきました先生方に感謝申し上げます。研究では、農村の復興過程における「価値の遠近感」を表現しようと試みています。今後もフィールドワークに基づいた事例研究を続けてまいりたいと思います。

【経歴】福岡大学工学部建築学科・助教。1991 年生、福岡県出身。2014 年九州大学工学部建築学科卒業、2020 年同大学院博士後期課程単位取得退学。博士（工学）。九州大学土木工学科景観研究室学術研究員を経て 2022 年より現職。

奨励研究賞（学生）

民間賃貸住宅所有者にみる応急借上げ住宅の提供意向に関する研究

佐藤 凌真

奨励研究賞、誠にありがとうございます。本研究において全面的なご協力をいただいた住まい LOVE 不動産様、親身なサポートをいただいた指導教員に感謝申し上げます。今後も復興デザインにおいて「自分にできること」を常に内省し、一つずつ積み重ねてまいります。

【経歴】2000 年生まれ。福島工業高等専門学校建設環境工学科卒業。豊橋技術科学大学工学部建築・都市システム学課程卒業。同大学大学院博士前期課程建築・都市システム学専攻（在学）。